

NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま

長い梅雨が終わったと思ったら、あっという間に真夏が到来しました。平和記念公園の周辺では、キョウチクトウ（夾竹桃）が一斉に咲き誇っています。

NPO 法人「がん患者支援ネットワークひろしま」会員の皆さまはいかがお過ごしでしょうか。ニュースレター第59号をお送りします。

広島県では、「がん対策日本一」の実現を目指して、第2次「広島県がん対策推進計画」を策定して、新たながん対策を始めています。皆さまの周りでも、がん検診やがん予防の話題が、少しずつ増えているものと思います。

「がん患者支援ネットワークひろしま」では、一般の皆さまがどうしたら「賢いがん患者」になれるのか、知恵やヒントを差し上げるとともに、専門医などの医療者側にも市民やがん患者の視点に立った医療の必要性を、引き続いて訴えていきたいと思っています。引き続き何卒よろしくご支援のほどをお願いいたします。

理事長 廣川 裕



● 今年度の第2回（通算で第56回）「市民のためのがん講座」は、「大腸がん」の特集です！！

NPO 法人がん患者支援ネットワークひろしまでは、平成25年度も「市民のためのがん講座」を開講しています（昨年度から無料）。今回は「大腸がん」の話題で、7月27日（土）の午後2時から開催いたします。

「大腸がんに対する内視鏡手術の進歩」 岡島 正純先生（広島市立広島市民病院・外科・副院長）

「大腸がんの再発診断と放射線治療」 廣川 裕（当会 理事長、広島平和クリニック院長）

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ（袋町小学校の隣：本通りアンデルセンの横の道を南下、すぐ左側）  
いつもの場所と違います。ご注意ください！

● 第22回公益財団法人 広島がんセミナー 県民公開講座 「高齢者のがんに対する取り組み」

平成25年9月22日 開催予定

『公益財団法人広島がんセミナーは、平成25年4月公益化への移行を記念して、県民公開講座「高齢者のがんに対する取り組み」を平成25年9月22日広島国際会議場で開催します。講師は、基調講演の三浦公嗣厚生労働大臣官房技術総括審議官、田村和夫福岡大学医学部教授、廣川裕広島平和クリニック院長の3名であり、医療対策、抗がん剤、放射線治療の面から、それぞれ高齢者のがんについて解りやすく講演して頂きます。』

（広島がんセミナーのホームページより転載：詳細は、10ページ）

## ● 「高齢者に優しいがん放射線治療」

### 広島がんセミナー 県民公開講座 「高齢者のがんに対する取り組み」の抄録集より抜粋

がん治療は年々進歩していますが、とくに放射線療法への進歩には著しいものがあります。放射線治療装置の進化やコンピュータ技術の進歩により、立体的にがんの広がりを捉え、その広がりに応じて自在な形でピンポイントに放射線を当てる高精度な放射線治療ができるようになりました。

昔は「コバルトを当てて、がんの痛みを取る」というような使われ方が多かった放射線治療ですが、今ではリニアックという装置で症状を緩和するための放射線治療だけでなく、「切らずに治すがん治療」の中核として使われています。

放射線治療は早期のがんでは、切らないことで患部臓器の形や機能を損なわずに治せます。手術しても治療率が低い進行がんや再発がんでは、薬剤（化学療法）と放射線との併用で治せることも多くなりました。放射線治療は、乳がん、肺がん、頭頸部がん（舌がん、喉頭がんなど）、食道がん、子宮頸がん、前立腺がんなどで活躍します。とくに高精度放射線治療専用の装置を使うことにより、放射線をがん病巣だけに集中して周囲の健康な臓器を防護でき、治療中の副作用や治療が終わってからの後遺症を少なくできるので、高いQOL（生活の質）が得られます。

初めてがんと診断された場合に、皆さんはどんなことを考えるでしょうか。「早く治療を始めて完全に治して、早く元気な日常生活を取り戻したい。できれば身体への負担や医療費の負担が少ない治療法を選びたい。」こんな気持ちは、年齢に関わらず共通するものだと思いますが、高齢者では「完全な治療」よりも「優しい治療」を求める傾向が強いように思います。

広島県は「がん対策日本一をめざす」と宣言し、いくつかのがん対策事業を進めています。広島駅北口に隣接して、「高精度放射線治療センター（仮称）」を整備して、より高度で効果的な放射線治療を平成 27 年度から開始する計画も目玉事業の一つです。日本のがん患者さんのうち約 25%しか放射線治療を受けていないのに対し、アメリカでは約 65%のがん患者さんが放射線治療の恩恵を受けています。新世代の高精度放射線治療が、「優しいがん治療」として広く一般の皆さんや病院関係者に理解され、被爆地のこの広島で「究極の放射線の平和利用」として、今まで以上に有効に活用されることを祈っています。

理事長 廣川 裕  
(広島平和クリニック院長)

#### 高精度放射線治療センター(仮称)の整備 ～平成27年度運営開始予定～

センターは地上2階建て、延べ3400平方メートル。がんを切らずに放射線を当てる治療に特化し、原則として通院患者を対象にする。病床は設置しない。開設時は、常勤の放射線治療医3人、常勤の診療放射線技師8人、高精度リニアック3台の体制を敷く。

(中国新聞)



## ● 連載「がんになって(16) - 覚悟の涙 -」

まずは私の話。2004年、42歳の時、がんと診断された。3月より化学療法が始まった。その前年、父が脳梗塞で倒れた。以降、ほぼ寝たきりで、私の病気の事も理解できなかった。子の立場としては、不幸中の幸いであったのだが。

4月中旬、親戚よりお見舞いの電話があった。内容は辛辣であった。「井上で色々な事が続くのは、先祖を大切にしないからではないの。私もあの世など信じないけれど、毎日、仏様を拝んでいるわ。以前、お母さんから仏壇を買ったと聞いたが、魂入れの式もしていないでしょ。それと、お父さんは次男だから、本家の墓には入れないのよ。お墓はあるの。」私はそれまで、入魂など知らなかったし興味もなかったが、一転して急に、父のことでなく、自分が死んだらどこの墓に入れるのか、心配になった。早速、檀那寺に連絡し、5月1日、法要を営んだ。これで、私が入られる仏壇ができた。翌朝、倉橋の西蓮寺へ向かった。父、私の入る墓があった。伯父様が用意されていたとのことだった。

次は。2013年3月27日、笑顔が素敵な美人女優、坂口良子さんが、結腸がんのため、亡くなられた。享年57歳。通夜、告別式は故人の遺志により近親者のみで執り行われ、29日に公表された。この夜、追悼番組が放送された。翌日のスポーツニッポンより。

『坂口さんと尾崎は10年以上の事実婚の末、昨年8月に結婚。坂口さんはテレビ番組で「最後は一緒のお墓に入りたい」と話していた。披露宴は、夫の故郷の徳島県海陽町で行った。関係者によると、坂口さんは2011年から体調を崩し、病気を知った2人は、残り少ない日々を夫婦としてともに過ごそうと決めたようだ。』

私は29日当直だったので、病院のテレビでこの番組を見た。ご主人の尾崎とは、プロゴルファーの尾崎健夫である。番組の大半は、昨年8月の再放送であった。ご主人様と一緒に海陽町へ帰り、93歳の義母に報告することから始まる。良子さんは何度も眼に涙されていた。結婚式、披露宴でも大粒の涙。病気の話は、最後まで公にされていなかったため、この時見ていたら、嬉し涙に見えたのであろう。しかし、病気のことを知って、再放送を見ると。尾崎家の仏壇に手を合わせて涙され、お墓で涙されていた。そして、私も聞いた。「最後は一緒のお墓に入りたい」。



良子様のお気持ち、よくわかる。覚悟の涙だったのだ。がん患者は、自分の葬式、お墓のことも考えているのである。この思いを皆様に伝えたくて、今回は筆をとった。

最後に。良子様のご冥福をお祈りし、合掌。

理事 井上 林太郎



## ● 「中学時代の友人のがん闘病記」

広島県のがん対策推進協議会は、3月に推進計画をパブして以降、新しい動きがありません。したがって、推進協議会に関する報告はありませんので、今回は、私の中学時代の同窓生の壮絶ながんと闘病について紹介させていただきます。

彼は、2011年11月に食事がのどを通りにくい状態になり、胃カメラを入れて検査しようにも腫瘍が邪魔をして、その先には入れない状態。12月に悪性がん、レベル2~3（限りなく3に近い）という検査結果が出て、担当の外科医からこのままでは1~1.5か月後には、食事はおろか水も通らなくなり、3か月位しかもたない。即手術をしようと勧められたが、同級生に経験豊かな医師がいて、そのアドバイスも受けて、手術をせず、自然療法、食事療法でがんを治すことに決め、闘病生活が始まった（奥様もちろん大賛成）。彼は、節目ごとに闘病記を6回にわたって送ってきたが、その要約を紹介します。

### 1回目）スタート

#### 1) 食事療法

玄米と野菜中心（白米、肉、魚、果物、菓子、アルコール、コーヒーはだめ）、50回以上嚙む。

#### 2) 自然療法

光線療法、枇杷の葉温灸療法、コンニャク湿布など体温を高めるための療法。

#### 3) 免疫療法

体温を上げるために、一日8Km歩く。（結果、体温は36.0℃→36.7℃にアップ）

### 2回目）2か月後

余命数か月という告知には、少なからず動揺した。しかしせめて一年という想いで、がんの進行を抑えることに取り組んできたが、食事の喉のとおりは違和感なく、がんが進行している気配は感じられず、第2ハードルは突破できた。

### 3回目）3か月後

第3の関所を無事通過。されど同級生の医師からは「もう治ったのではないぞ。進行が止まっているだけで、むしろこれからが本当の勝負」と叱咤激励された。自分自身、正直いって、大きな希望の影に、ささやかな失望を感じたが、がんとは共存共栄（？）と割り切って、今後の人生のやり残しに優先順位をつけてやってゆくことにする。

### 4回目）6か月後

腰痛、便秘などが出てウォーキングもできなくなり、体力と気力が低下して無気力な闘病生活を余儀なくされていた。その時、同級生の医師から渡された健康落語で、その中にある「がん治療の最大の特効薬は生きたいと願う気力、意欲」という言葉に励まされ、落ち込みから脱出できる糸口が見つかったような気がした。

一緒に戦っている奥さんから、「専門の外科医から1~1.5ヶ月で食道閉鎖！と断言されたのが、6か月経過しても食事がのどを通っていることが奇跡で、あなたは感謝の念がなさすぎ」と叱られながら、いろんな可能性を求めて、自然療法に理解のある先生を訪ねている。

### 5回目）8か月後

食事中に通過障害がおこるようになり、通過不良は勿論、食べたものまで戻すようになり、前に尋ねた内科の先生に駆け込んだ。結果は「がんの肥大ではなく、一種の拒食症でしょう」という診断。「何でも食べたいものをおいしくいただくようにしてください！このままだと飢え死にしますよ」

主食を玄米スープにしたり、副食はよく嚙むようにしたらアクシデントは収まった。別の友人が送ってくれた栄養補強剤「エンシュア-H」を飲みながら、奥さんと何事にも積極的に取り組もうと確認しあった。

### 6回目）一年後（最終経過報告）

食道は完全に閉鎖状況となり、栄養補給と胃ロウ増設手術のために、同級生の医師の勧めもあって、入院。術後の経過もよく一ヶ月で退院。放射線治療も勧められたが、延命のための治療ならやらないと断った。「この6回目の報告を以て、最後の報告とさせていただきます」



以上が、彼から送られてきた経過報告の要点ですが、彼は1ヶ月後の1月には帰らぬ人になりました。私が、この同級生の闘病記を投稿する気になったのは、以下のような思いがあったからです。

1. 非常に難しい段階まで来た食道がんに対して、従来の手術、放射線、抗がん剤というやり方ではなく、食事療法、自然療法、免疫療法というやり方で頑張ったこと。残念な結果に終わりましたが、経過報告が来るたびに、「良くなってくれ！負けるな！」と祈りながら、心の中で応援してきました。近代的医療に頼るだけでなく、「自己治癒力」を高めて、がんと対峙するあるいは共生するやり方に共感したからです。

彼の闘病経過を見て、やはり「がんに負けない気力、体力」を維持することが、延命、回復のキーになると改めて感じました。

2. 彼は生前、責任感の強い、面倒見の良い友人でした。自分が経営していた会社を今後どうするかを一番気にかけていたと思いますが、それを片付けた後は急速に衰えたような気がします。これで、この世にやり残しはないと思うことによって、気力も衰えたのではなかろうか？ と想像しています。残念な気持ちでいっぱいですが、心からご冥福をお祈りいたします。

こんな事例もあるということで、紹介いたしました。

副理事長 井上 等

## ●「カンボジア便り」 活躍中の日本人（2）

前々回に続いて、カンボジアで活躍中の日本人のご紹介です。二人目は「田中千草さん」。

北海道出身の教師ですが、ひょんなことからカンボジアに来られています。彼女の小学校での任務は「音楽の授業を始めること」。幼少時からピアノをたしなんでいた千草さんですが、本来は英語の先生で、音楽の授業の組み立て方などは全くご存じなかったとか。それから一生懸命勉強され、シェムリアップ州のワットボー小学校（全校生徒が約5000人！のマンモス校）で見事音楽教育を軌道に乗せられています。我々が訪問すると、音楽部の子供たちが歓迎演奏をしてくれました。

彼女はカンボジア人の子供を養子に、母親としての役目も果たしています。「少なくとも、この子供たちが成人するまではカンボジアにいます。」と心強いお言葉でした。華奢な体のどこにそんなエネルギーが潜んでいるのか、感嘆するばかりです。

理事 藤本 真弓



田中千草さんの活動はこちら → <http://anacott.web.fc2.com/>

## ● Dr. 井上林太郎の書籍紹介

がんペプチドワクチン療法 ー第4のがん治療法への期待 <第1集>

監修者；中村祐輔

編者；市民のためのがんペプチドワクチンの会

旬報社 2012年9月初版



### はじめに

外科手術、放射線治療、抗がん剤治療が、エビデンス(科学的根拠)に基づくがんの治療法である。それに対して、免疫療法は50年以上前から研究されていたが、科学的な根拠は不十分であった。

1991年、ベルギーのグループが世界で初めて、がん免疫を分子レベルで証明し、歴史は動いた。メラノーマ細胞の抗原をコードする、MAGE 遺伝子を同定したのだった。以後、研究は加速し、様々ながんの抗原が報告されている。

米国 FDA(食品医薬品局)は、2011年、「がん治療用ワクチンのための臨床学的考察」を発表し、がんワクチンを治療薬として承認する際に満たすべき要件を提示した。そして、同年、前立腺がんワクチンが承認された。

歴史的背景から、「がん免疫療法」を聞くだけで顔をしかめる医療従事者は多い。本書を読む前は、私もその1人だった。現在、米国では、「免疫療法を否定する医師は不勉強な医師である」と言われているようだ。以前は、非特異的免疫療法だったが、今は、分子生物学に基づく、特異的免疫療法なのだ。よって、今回は本書を紹介する。

尚、本書は、舌がんの経験者である會田昭一郎さんが主宰者である「市民のためのがんペプチドワクチンの会」が編集されているので、一般の人にもわかりやすい内容である。

注)メラノーマ(悪性黒色腫)は、皮膚がんの1つで、転移しやすい高悪性度のがんである。

注)抗原は、リンパ球(広い意味での抗体)と反応し、がん細胞が死ぬ(免疫反応)。

**監修者、中村祐輔の紹介**；1952年生まれ。専門は、遺伝学、分子生物学。1991年、大腸がん抑制遺伝子 APC を発見。東京大学医科学研究所教授を経て、2012年4月より、シカゴ大学医学部教授、個別化医療センター副センター長。言うまでもなくがんペプチド療法の第一人者で、多くの施設が医科学研究所から、ペプチドワクチンの提供を受けている。

### 本書の内容・感想

本書では、実際に治療を行っている医師が、自分の専門分野のワクチン療法の現状について、正確に丁寧に紹介している。

まず、本書を用いて原理を説明する。がん細胞の表面には様々な物質(蛋白質)がある。分子生物学の手法を用いて、正常細胞になく、がん細胞にのみある蛋白質を見つける。その蛋白質の一部分であるペプチド(9個のアミノ酸)を標的にする。そのペプチドをわきの下などの、リンパ節に近いところに皮下注射する(ワクチン注射、図1参照)。すると、リンパ球を教育する(活性化する)仕事を担う、樹状細胞がそのペプチドを細胞内に取り込む。そして、ペプチドの情報をリンパ球に教えて、そのペプチドを持つ細胞、即ち、がん細胞を攻撃し、殺すように命令する。図の中では、命令を受けたリンパ球は、活性化したリンパ球となっているが、別名キラーT細胞(殺し屋T細胞)とも呼ばれている。

本当に、がん細胞を殺せるのか。肝臓がんの場合、ペプチドの名前は、グリピカン-3(GPC3)ペプチド。治療名は、GPC3 ペプチドワクチン療法。図4のように、腫瘍(がん)が、縮小、消失、壊死した症例もあった。

本当に、血液中に、キラーT細胞が増えているか。図5のように、増えている。

本当に、がんの中に、浸潤しているか。図6のように、浸潤している。

誘導できたキラーT細胞は、本当に意味のあるものであったのか。進行・再発肝細胞がんの患者様33人を対象に、国立がん研究センターで行った結果を解析した。図7のように、キラーT細胞を多く誘導できた



場合は、少ない人に比べて、約4ヵ月生存期間が長かった。意味があったのだ。

気になる副作用は、注射部位が赤く腫れることはあったが、食欲不振、血液障害などの重篤な副作用はなかった(図3)。

本章「肝臓がんにおけるペプチドワクチン療法」を担当された、国立がん研究センター東病院、澤田雄医師、中面哲也医師のまとめは次の通りである。「我々の行っている GPC3 ペプチドワクチン療法をはじめ、がんペプチドワクチン療法は、標準治療となる可能性は十分にあるので、これからも私たちは、臨床試験を着実にを行い、さらに強力な免疫療法あるいは様々な治療法との併用などを日々研究し、患者さんに役立ちたいと考えている。」

最後に、本書の監修者、中村祐輔教授の、含蓄のある文章を紹介する。

『20世紀の終わりあたりから急速に進みつつある分子標的治療薬(がんの特異性の高い標的を探し出し、その標的に効果よく作用する薬)の開発とその目覚ましい効果を知る現状では、新しい薬をどのように評価して患者さんに届けるのか、その方法論から見直さなければならない時期に来ています。20世紀に利用された毒性の高い(副作用の強い)抗がん剤とは考え方を変えなければならないのです。』

現在、ペプチドワクチン療法が、第4の治療法として、注目されています。この本を通じて理解するとともに、皆様も必ず私と同じように、希望がもてると思います。是非読んで下さい。

理事 井上 林太郎

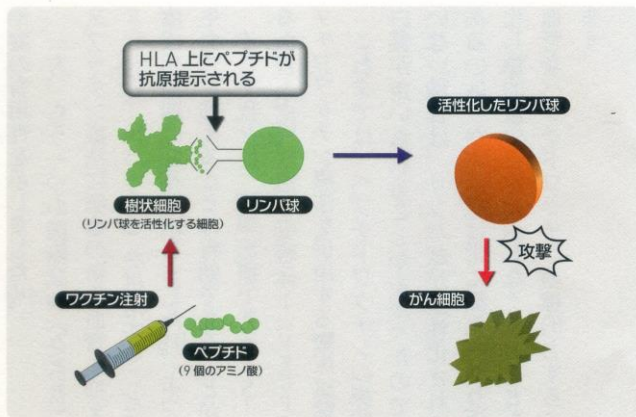


図1 がんペプチドワクチン療法の概略

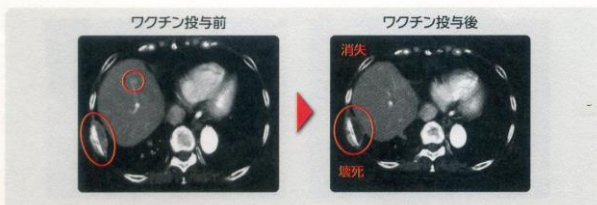


図4 ワクチン後に腫瘍が縮小、消失、腫瘍内部が壊死した症例のCT写真。ワクチンを3回接種した1ヵ月後、腫瘍が縮小、消失、壊死した

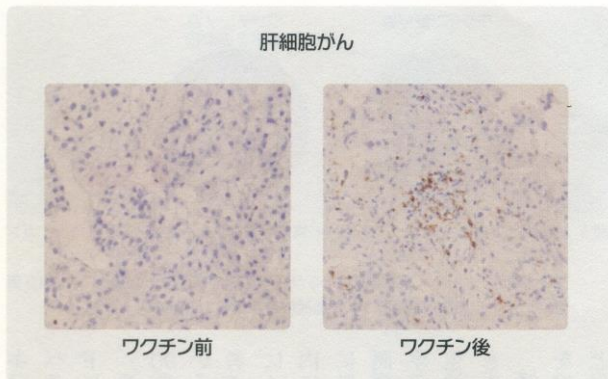


図6 ワクチン前後の腫瘍の組織像  
ワクチン後、腫瘍内にキラーT細胞がたくさん浸潤している(右写真中央、茶色で示したものが、キラーT細胞)



図3 副作用について  
ワクチンを注射した部位が赤く腫れる。それ以外の副作用はほとんどない。

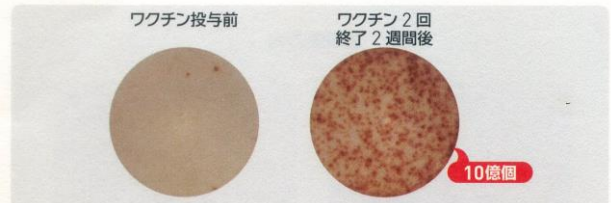


図5 血液中の活性化されたキラーT細胞の数を調べる検査(インターフェロン・ガンマ・エリススポットアッセイ)  
赤い点は、ワクチンで誘導されたキラーT細胞が活性化した跡を示す。10億個は、赤い点の数から計算された血液中のキラーT細胞の数

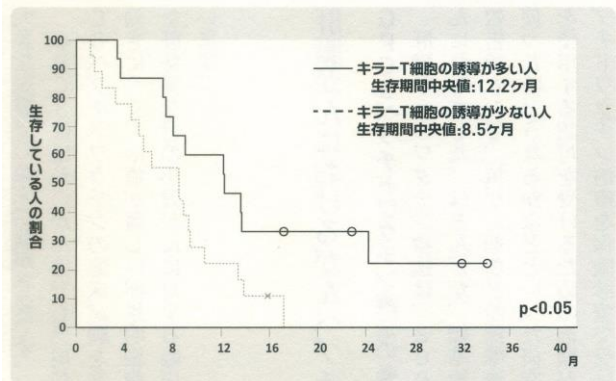


図7 生存曲線(誘導できたキラーT細胞と生存期間の関係)  
誘導できたキラーT細胞が多い人は、約4ヵ月生存期間が長いことがわかった。統計学的に意味のある差も証明されている

## ● 一病息災 「元気とは（3） - 気概 - 」

前回は、腹八分目ないしは食事のカロリー制限を適度に続けると、長寿遺伝子“サーチュイン”が働いて、健康が維持され長生きにつながるということを述べました。一方、私たちは病気に悩んでいる時や、精神的なストレスなどが加わったりすると、なんとかその危機を乗り越えるべく、元気を出そうと頑張ります。気力をふりしぼって対処しようとし、この時に働く元気の素（もと）とは、いわば精神的なサーチュインであると私は考えています。この活性化によって気力が湧いて、困難にくじけない強い“気概”に発展するのではないのでしょうか。



元気の素（もと）は、誰もがもっています。たとえくじけそうになっても、大きな“気概”でもって対処すれば、落ち着いた日常生活を送ることができるのではないかと思います。

さあ！ 元気（気概）を出して健康を維持し、長生きしましょう！！

理事 和田 卓郎

## ● 在宅医のつぶやき

ご存じのようにこれから未曾有の高齢化社会を迎える日本にとって、認知症人口の増加も避けて通れない課題となることは間違いありません。また、がん患者さんにとっても、がんの苦痛に対するケアばかりでなく認知症に伴う色々な症状に対しても適切なケアを行っていくことが大切になるケースも増えてくるものと思われます。

しかし、認知症症状のコントロールが難しいケースも少なくないため、認知症症状のために病院や在宅での療養難しく患者さんの行き場がなくなってしまっていて、がん難民になってしまうケースも増えてくるかも知れません。（ので、認知症症状のあるがん患者さんやご家族が、できるだけ穏やかに過ごしていただけるようにケアしていくために、病院、緩和ケア病棟と在宅とが如何にして連携していくかを考えていく必要があります。）

次回からはがん患者さんと認知症について、続けてお話ししていく予定です。

理事 田村 裕幸

## ● Dr. 津谷のコーナー

津谷先生は、ご多忙のため、夏休みです。

## ● 心という治療力—サイコオンコロジーへの招待—

次回をお楽しみに。

理事 佐伯 俊成



## ● 広島県内のがん関係イベント情報

### ○平成25年度第2回「市民のためのがん講座（全6回シリーズ）」（通算第56回）

日時：2013年7月27日（土）午後2時～4時15分（開場：午後1時30分）

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ（TEL:082-545-3911）

（袋町小学校の隣：本通りアンデルセンの横の道を南下、すぐ左側）

いつもの場所と違います。ご注意ください！

テーマ：「大腸がんに対する内視鏡手術の進歩」

岡島 正純先生（広島市民病院・外科・副院長）

「大腸がんの再発診断と放射線治療」

廣川 裕（当会理事長、広島平和クリニック院長）



受講料：無料

問合せ：090-4573-1044（担当：高野）

連絡先：事務局（TEL 082-249-1033, <http://www.gan110.rgn.jp/>）

### ○第21回 NPO 法人広島がんサポート主催セミナー

日時：2013年7月28日（日）午後1時～2時

場所：ピンクリボン39ビル8階 サロン「セミナールーム」

広島市中区三川町1-20（中央通り 新天地交番隣）

内容：「前立腺がん診療の最前線～手術ロボット da Vinci による内視鏡手術」

亭島 淳 先生（広島大学大学院 医歯薬保健学研究院腎泌尿器科学・講師）

参加費：無料（定員30名）

申込方法：下記問い合わせ先まで、電話、FAX、Eメールにて

問合せ先：広島市中区三川町1-20

電話：082-544-3770、FAX:082-544-3771、メール:info@hiroshima-cs.jp

主催：NPO 法人広島がんサポート

### ○リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2013 広島

日時：2013年9月15日（日）13時から16日（祝）13時まで 雨天決行

場所：広島市立広島特別支援学校（〒734-0013 広島市南区出島4-1-1）

内容：リレーフォーライフは、24時間がん闘う方々の勇気を称え患者や家族、友人、支援者と共に交代で夜通しグラウンドを歩きます。地域一丸となってがん闘う連帯感を育む場として、がんを悩む事のない社会を実現するために募金活動を行うチャリティーイベントです。収益金は日本対がん協会に寄付され、がん患者支援活動に役立てられます。

対象者：制限なし（がん患者支援を願う人）

参加費同費：1000円

申込：事前申込要（定員なし）

申込方法：FAX、またはEメールにて

リレーフォーライフ広島実行委員会事務局

〒730-0051 広島市中区大手町2-5-11-204

（電話・FAX：082-542-5053、Eメール：info@rfl-hiroshima.jp

<http://rfl-hiroshima.jp/>）

主催：（公財）日本対がん協会、リレーフォーライフ広島実行委員会

